

Title	ポール・ヴェルレーヌの愛国心
Sub Title	
Author	山田, 直(Yamada, Tadashi)
Publisher	慶應義塾大学法学部
Publication year	1983
Jtitle	慶應義塾創立一二五周年記念論文集：法学部一般教養関係 (1983. 10) ,p.87- 103
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=BN01735019-00000003-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ポール・ヴェルレーヌの愛国心

山田 直

序 論

ポール・ヴェルレーヌ Paul Verlaine は強い愛国心を持っていた。彼は事あるごとに、祖国フランスに対する純粹な愛情を、フランス人であることの誇りを、情熱的に語って憚らなかつた。彼の作品中には愛国心が卒直に表明された個処を容易に数多く見出すことができる。たとえば『幸福』*Bonneheur* 詩集の第XXX詩篇の冒頭で、次のようにうたっている。

祖国への愛は神への愛に次ぐ

最初にして最後の愛。

それは真昼の光の中に燃える火

私たちの眼差しはそれを受け 天上の火のように輝く。⁽¹⁾

この世に生を受けた子供が、神の恩寵によって無事に成長し、大人になっていくにつれて、自分の生まれ育った土地を愛するようになり、隣人たちとの連帯感が発生し、健全な祖国愛が形成されていくという、きわめて自然な

愛国心誕生の過程がこの詩で引き続きうたわれている。『幸福』というこの詩集の性格からして、ここに描かれた祖国愛は正常な、オーソドックスな印象を与えるのも当然であろうか。

ただしヴェルレーヌの愛国心の性格が常にこの詩でうたわれているような自然で正常なものであったかどうかとなると、そこには異論が生じるところであろう。既に幾つかの拙論で考察してきたように、ヴェルレーヌの政治思想は首尾一貫した一定したものではなかった。文学者の多くが、というより普通の人間の多くがそうであるように、彼もまた青年時代にはかなり激烈な左翼的反体制の政治思想を信奉していたが、理想社会の実現に幻滅を感じ、ことに宗教上の回心をおこなってからは、しだいに保守化していった。しかもそれがその時どきの状況によって心情的に左から右へと大きく揺れ動いた。この思想上の変化に連動して、彼の愛国心の色合いもまた変化を示すことは当然であろう。

そして更に、これも既になん回も拙論中で指摘したように、ヴェルレーヌは自己の生を作品の上に反映させるタイプの文学者ではあったが、その反映は必ずしも忠実で正確な性格を持たなかったことを、ここでも考慮しなければならぬ。彼は作品に内在する意図のためには、事実を誇張し、あるいは時には歪曲することをためらわなかった。上記の詩のなかに表明された彼の愛国心があのような形で描かれているのは、詩集『幸福』が基本的にいつて彼の信仰告白の詩集『英知』*Sagesse* の側に属しているからである。彼の作品、特に評論はそうなのだが、これを判断するに際しては、彼がどのような性格の雑誌に、どのような読者に向けて書いたかということを中心に念頭に置き、この方向付けが作品に与えた色合いを正しく識別しておく必要があるのである。

上記のように、彼の作品に現われる愛国心の告白は、ある種のフィルターをかけて、その実像をとらえなければならぬ。だがしかし、このようなさまざまな留保条件を考慮した上でもなお確実にいえることは、彼がフランス

に対して強烈な関与性帰属性を感じていたこと、フランスを祖国として意識化し、認識していたことである。ヴェルレーヌの発言はすべて眉唾ものであるとして、彼の言動を信用していない人びとでさえも、ヴェルレーヌのこのような形での愛国心を否定するものはいない。

読者は、ヴェルレーヌが愛国心を持っていたという指摘は一応容認してくださるにしても、上記のような愛国心ならフランス人の誰もが自然に所有しているはずのものであり、従って詩人の特質としてことさら論じるまでもないではないか、と疑問を感じられるかもしれない。確かにフランス人なら誰でも自分の生まれ育ったフランスに強い関与性を持ち、フランスを祖国として認識するのは至極当然である。しかしヴェルレーヌのばあいは必ずしもそうかたんに割り切れないものがあつた。とりあえずここでは彼の関与性には外的な要因が大きく働いていたこと、また彼にはフランス以外に他の国の国籍を選択する機会もあつたこと等の事実を指摘すれば、ヴェルレーヌの特殊な立場と、そこから生まれた愛国心の独自性とを推定できるであろうか。

一方、ヴェルレーヌの愛国心のこの独自性も、またその必然性も、決して理解しにくいものではない。彼の生立ちと生活環境とをその歴史的地理的条件の下に考察していくならば、むしろ容易に把握しうるものといえよう。以下この視座に拠りながらヴェルレーヌの愛国心を考えていくことにしたい。

本 論

ポール・マリ・ヴェルレーヌは一八四四年三月三十日午後九時頃、北仏の軍事都市メッツ Metz のオート・ピエール通り二番地で出生した。父ニコラ・オーギュスト・ヴェルレーヌ *Nicola-Auguste Verlaine* は四十六歳、母エリザ *Elisa* は三十六歳。ポールはヴェルレーヌ夫妻にとつてはかなり晩年の子であり、しかも一人息子であつ

た。ニコラはメッスに駐屯する工兵連隊付きの大尉であった。このようにポール・ヴェルレーヌは職業軍人の家に生まれ、そしてこの家庭環境の下に幼年期を過ごしたという条件をまず第一に挙げなければなるまい。

翌四十五年から四十九年にかけて、ヴェルレーヌ一家は大尉の任地に從ってモンペリエ Montpelier、セツト Sete、ニーム Nîmes と南仏諸都市を転々とし、四十九年にまたメッスへ歸っている。当時フランスには三つの工兵連隊があり、北仏に二個連隊、南仏に一個連隊あったからである。

一八五一年ヴェルレーヌ大尉が軍職を去り、パリへ出てくるまで、ポールは文字通りラッパの響き、騎馬行進、将校家族の集会といった雰囲気のなかで成長していったのである。軍人の家庭と愛国心を直結させるのはいささか短絡的ではあるが、しかしそこに愛国心を芽生えさせやすい条件が存在していたことを否定できないであろう。

ヴェルレーヌは『告白』 Confessions の冒頭近くで、この時代の生活環境の一情景を次のように回想している。

「私たちが住んでいた家の二階から、毎朝私は、これはその日によって違ふのだが、正装あるいは略服を着た陸軍砲工兵学校の生徒たち、砲兵工兵両軍の士官候補生たちの長い騎馬の縦列が通りすぎるのを眺めたものだ。そしてすっかり軍人にあこがれてしまった私の幼い心が、どんなに勇んで、彼らの後を追って速歩で、ギャロップで走ったことか！ 私の父は工兵大尉だった、そこで両親の家で交される会話は軍隊内の話でもちきりだったし、連隊の士官たちは毎週の夜、ティーパーティーやらホイスト遊びに熱中するのだった。私は父親の軍服を非常に誇りにしていた。ピロードの胸当がついたフランス陸軍の軍服には、アルジュエーとトロカデロで得たスペインとフランスの勲章がついていた。キャピテーヌ・アジュダン・マジョール capitaine-adjutant-major の三色の羽のついた二角帽、剣、びったりした濃紺のズボンに赤と黒のバンド、革のゲートル！ しかもまた、《これ以上みごとにはいかない》というほどすばらしい着こな

して軍服を着用した非常に背の高い男、軍人らしくりしい、そして優しい顔をととても誇りに感じていた⁽³⁾
 ……」

上記引用文にはメッスの町の雰囲気、守備隊勤務の将校の日常生活、彼の家庭と父の風貌とがよく表現されていると思う。確かに父ヴェルレーヌ大尉は典型的な軍人タイプで、長身の偉丈夫であったといわれる。後に元師に昇進した当時の第二工兵連隊長ニール Niel 大佐は、ヴェルレーヌ大尉の剛直な性格を深く愛し、信頼していた。軍人社会の目からみれば、大尉がいざというときに頼りになる実戦向きの将校に映っていたことはまちがいない。従って軍人の家に育ったポールが、そのような自分の父を誇りに感じたのも当然であろう。そして少年ポールの心のなかに愛国心の芽が潜在していたとすれば、上記の生活環境はこれを大きく開花させるに力があつたと推定することができよう。

父方のヴェルレーヌ一族も、母方のドエ Däde⁽⁴⁾ 家も地方に根をおろした小さな土地所有者たちであつた。名門貴族の家柄でもなく、歴史に残るような傑出した人物を輩出してもいないが、彼らの多くは地主、中堅将校、僧侶、学校教員、商店主等であり、地方の保守的社会を構成する人びとであつた。もちろん例外的反逆児もいたが、しかし大勢は変わるべくもなかつた。ポールが育つたヴェルレーヌ家も、けっきょくはこの保守的雰囲気にかつがるものであつた。ここにも彼の愛国心を方向付ける一つの要因の芽が潜在していたことを推測できるのである。

第二の特殊要因として彼の生活環境が位置した地理的条件に注目してみたいと思う。すなわち彼が生まれ育つたメッスという町が、フランス北東部の独仏国境に近い軍事都市であつたという事実である。

前述したように、ポールがメッスで生活したのはそんなに長い期間ではない。通算しても約四年間にしかすぎな

い。南仏での生活は彼の一歳から四歳までにあたるが、ポールの精神形成に重要な役割を演じているとは思われない。彼の『回想録』の類のなかにも、南仏時代の想い出を語った箇所は少ない。この時代の彼は少年というよりむしろ幼児だったのだから、多くの記憶が残されていないのも生理的にいって自然な現象なのであろう。

これに反し、メッス時代の想い出は彼の少年時代の回想の中心主題であり、量的にいっても圧倒的に多い。確かに一八四九年～五年は子供として、人間として、いわゆるものがつく年齢にあたり、この僅か三年間が少年ポールの精神に強烈な印象を与え、鮮明な記憶となっていくまでも残ったのである。そしてそれと同時に郷土という意識が芽生え、定着していった。ポール・ヴェルレーヌにとつての郷土は常にメッスであり、メッスを中心とした国境地帯であつて、これに対する彼の愛情は終生変わることがなかった。ボルネック J.-H. Boneque のいうように、彼はなによりまず「北国の子」であつたのである。⁽⁵⁾

郷土の意識は必然的に祖国の意識に連結し、祖国の意識は愛国心に結びつく土壤を用意する。彼は愛する父祖の地を語るに際しても、次のようないい方をするのである。

「フランスのなかにはアルデンヌと同じくらい美しい地方は幾つかあるだろうけれど、たぶんこれ以上美しい地方はないだろうけれど、しかしいかなる観点からしても、特にこれ以上フランス的な地方は存在しない。」⁽⁶⁾

国境地帯にひろがるアルデンヌの森⁽⁷⁾は、地理上フランスのまさに境界に位置しているはずなのだが、詩人の意識のなかではフランスの中心に据えられているのである。

彼が愛した郷土が国境地帯にあつたという地理的条件が、彼の愛国心の性格に強い影響を与えたであろうことが次に想定されなければなるまい。人為的に対照的な生活条件を仮定してみると、同じ地方都市でもフランスの中央

部に位置するオルレアンあたりに彼が生まれ育ったとするならば、彼の愛国心もずいぶん異なった形に形成されていったことであろう。周囲がほとんどすべて同国人であり、外国人あるいは敵国人は観念的な存在であるにすぎない生活環境にある人びとの祖国意識と、外国と外国人とに直接的に接触している辺境地帯の人びとの意識とは、そこに大きな開きがあるのは当然であろう。国境の町の住民にとって隣国人との接触は各個人の肌じかに感じる体験であり、しかもそこには直接的な生活上の利害関係が絡んでくる。本人一人だけの問題ではなく、周辺にいる親戚友人たちもまたそれぞれ同じ体験の所有者なのである。それ故に、彼らが集まったときの日常会話や体験的情報交換のなから、独特の、しかも鮮明な隣国観が自然に作りだされ、しらずしらずのうちに各個人の心に浸透していく。ヴェルレーヌのばあいもまたその例外ではありえなかったと思われる。

上記のような生活環境にあっては、人間は二つの方向、すなわち隣国との相互理解を深め、相方の協調によって平和的共存を計ろうとする国際派となるか、自国民即家族や隣人友人たちの利益を擁護し、隣国の影響力をできるだけ排除しようと努める戦闘的愛国者となるか、どちらか一方の生き方を選ばなければならなくなる。生温い中間的立場にたつ観念的理想主義者が生きる場は残されていないのである。ヴェルレーヌのばあい、二つの生き方のうち後者を採ったことは明らかである。

晩年に発表された『罵倒詩集』*Invectives* に収められた詩「メッス」*Metz* のなかで、

壮大な平原にたつメッスよ、

豊かな水をたたえた川は流れ、

森におおわれた丘、火のように燃えるぶどう畑、

大聖堂は渦巻となって天に聳え

そこには風がフルートに合わせて歌う、

そして聖堂は、神の大いなる御声、

ミュートによって風に答える。⁽⁸⁾

とメッスの町の美しい景観を描いてこれを称え、そして

おお、メッスよ、宿命によって定められた私の揺籃よ、

メッスよ、犯されてなお かつてないほどに

一層貞潔な そして一層けがれなき処女の町よ！

おお 私の子供時代がほほえみかける町よ！

おお 防備なき砦よ

はずかしめが先駆けた首府よ、

おお 私が愛した尊い母よ。⁽⁹⁾

とメッスを「私の揺籃」として、「尊い母」として確認している。これは前述のメッスに対する彼の郷土意識を証明するものであり、故郷を愛する詩人の心情の自然な発露と感じられる。

しかし同じ詩のなかで出会う次のような詩節は、彼の郷土に対する愛、祖国に対する愛が、一つの明確な性格を持っていることをよく示している。

あらゆる人民が兄弟だ！ それではもはやフランスもなく、

殉教者もいなかったというのと同じではないか！

もはや想い出もない、たとえそれが苦しくあろうと！

もはや至上の条理もなく、

確かで澄みきった信仰もなく、

もはやアルザスもなく、そしてロレーヌもない…

それは海の波を鞭打つと同じことではないか。⁽¹⁰⁾

彼の愛国心は四海同胞、国際平和、世界人民の形で表われてくるものではなく、愛国心の対象は祖国フランスであり、フランスの敵はすべてヴェルレーヌの敵であった。この点は驚くほど単純率直である。そしてこのような割り切り方ができたのも彼が国境地帯の住民の祖国意識の一方の面をそのまま強烈に持ち続けていたからであろう。

しかしその愛するメッサは憎むべき隣国によって「犯された」町でもある、という歴史的事実が相乗作用として加わってくるのである。前記引用詩句中の「犯されてなお かつてないほどに／一層貞潔な そして一層けがれなき処女の町よ!」、「はずかしめが先駆けた首府よ」という表現は、不幸な歴史を背負わされたメッサに対するヴェルレーヌの熱い感情をのぞかせている。

そもそもメッサの町の歴史は辺境都市の悲劇を典型的に具現した証言といえよう。フランス及びフランス人側から見たメッサは、古くからドイツへの門戸として栄えた町である。モーズル Moselle 県の県庁所在地で人口約一万、電気工業、プラスチック製品、皮革製品、家具等の製造業が盛んである。町の起源はローマ時代のケルト族の首府にまで遡る。中世ではカロリング王朝発祥の地として重要な役割を演じ、一五五二年アンリーII世が司教領だったこの地を譲り受け、一六三三年以来正式にフランス王国の一部となった。

従ってポールが生まれた一八四四年にはメッサはまぎれもなくフランス領であり、ポールは当然フランス人とし

て出生したことになる。

ところが不幸にも普仏戦争が一八七〇年に起こり、フランスは脆くも敗れ、一八七一年五月十日のフランクフルト条約によってドイツ領に編入され、一九一八年第一次世界大戦後までフランスへもどらなかつた。日本でこの町はメッスというよりメッツという名のほうが通りがよいのも、この間の事情をよく反映していると思われる。

上記のような普仏戦争の惨めな結果は、ポール・ヴェルレーヌを異常な緊張状態に追いこんでしまった。すなわち祖国フランスを保持しようとすれば故郷メッスを失うことになり、逆に故郷メッスを保とうとすれば祖国フランスを失うことになるというジレンマである。祖国も故郷も共にこよなく愛していた彼はまさに窮地に陥つたのである。

この心理的窮地にあつて精神の安定を保ち、そしてこれを高揚するためには、フランスをあくまで愛する祖国とし、愛する町メッスを殉教者とみなし、いつかは失地回復によって自分の胸に還ってくる故郷として希望を抱きつづけるより他はなかつた。

……おまえの葬儀のために

なんとという高貴な戦いが幾度戦われ

なんとという純粋な血が流されたことか。

おまえの名誉の葬いではないが、おまえの古い独立の葬いのために、

なんとという気前のよい軽率さが犯されたことか、

おまえの陥落にはなんとという深い喪の悲しみを味わつたことか、

おお、メッスよ、この凍りついた国のなかで！⁽¹¹⁾

なおもう少しの辛抱だ、いとしい町よ

みんながおまえのことを考えている、心安んじてあれ。⁽¹²⁾

我慢せよ、おお、我が麗しの町よ。

私たちは千対千となるだろう

一対百ではなくなるだろう、もう間もなく!⁽¹³⁾

あくまでメッスを見捨てない、という悲痛な叫びは、ヴェルレーヌだけでなく、フランスを愛しメッスを故郷とするすべてのフランス人の心の叫びであったことに間違いはない。このような人びとの愛国心が単純明快な形態、熱烈で排他的な愛国主義に向うこともまた必然であらうか。

私たちは極悪な者どもを追い払おう⁽¹⁴⁾

ヴェルレーヌにとってメッスの敵はすべて「極悪な」人間となってしまう。普仏戦争後はメッスの敵、すなわちドイツ人は極悪非道の人種であった。過去の文化人はともかく、少なくとも銃をとって攻めよせてきたドイツ人もまた人間であり、ドイツ軍のなかにも悪漢もいるであろうが、また一方人間性豊かな高潔なドイツ軍人もいるであろう、という考え方をいれる心の余裕はなかった。彼の愛国心はこのような切羽詰まった愛国心であった。偏見を論じるレベルを超えた、追い詰められた祖国意識であった。

さらに、彼が最後の砦と頼んだフランス人としての *identite* さえ、彼のばあい、必ずしも安定したものではなかった。フランスの国籍を保ち続けることさえ難しいということは、フランス国民としては特殊ケースであり、従っ

てそこから生まれる精神の緊張と不安感とはきわめて烈しかったと推定される。

大多数の人間にとって自分の国籍はいわば空気のように自然なものであり、それが無くなってしまうなどということは考えも及ばぬであろうと思う。外国に憧れ、あるいは外国に亡命したりして、その国に帰化するということ、つまり自らの意志によって生得の国籍を捨てるといふことはありえても、他からの圧力によって無理やり国籍を変更させられることはまさに異常事態であり、不幸な出来事といわざるをえない。しかしこの異常事態が不幸にもヴェルレーヌの身の上に現実⁽¹⁵⁾に発生してしまったのである。その結果彼はフランスを祖国として選択し、そしてそのために故郷メッスを失ったのである。故郷喪失の悲しみに耐えるためにも、彼は祖国フランスをなお一層愛さなければならなかった。

上記のようなヴェルレーヌをめぐる歴史的状況を第三の特殊要因として考慮しなければならぬであろう。フランスを祖国として選択するという行為を、ポールばかりでなく、父親ニコラもまたこれを行なっているという事実は、ヴェルレーヌの悲劇をなお一層宿命的にしているように思われる。ポールの父親ニコラ・オーギュスト・ヴェルレーヌ（一七九八—一八六五）はパリズール *Parisoul* に近いベルトリ *Bertrix* に生まれた。この辺境地帯にたまたま生まれあわせたという偶然が、個人の意志を超えた状況を彼に与えてしまった。まさに宿命といわなければならぬ。ベルトリは現在フランス領ではなく、ベルギー領なのである。

ポールは父親の出自とこの状況について、『告白』のなかで次のように書いている。

「……ほんとうに宿命というものがあるものだ。私の父もまた十六歳でナポレオン軍に志願入隊、（徴兵されたのではなかった）、一八一四年と一八一五年の戦役に従軍していたのだが、この一八一五年の六月十八日に、我が軍旗の下に奉職しつづけるために、国籍の選択を迫られたのであった。彼がフォレ県でフラ

ンス人として生まれたという理由をあげたのだが、この土地はサン・タリアンスの勝利によって強制された条約によって力づくで、まさに力づくで、急造されたオランダ王国にはめこまれ、今日ではベルギー領リュクサンブール地方の一部となっている。⁽¹⁶⁾

フランス人として生まれ、自分の祖国に疑いを持たなかった人間が、いつのまにか、本人の意志と係わりなく、外からの力によってフランス人でなくなっているという悲劇を、父ニコラもまた体験していたのである。ことにニコラは大ナポレオンに憧れ、フランス軍を自分の意志で選びとり、フランス軍人であることを心の誇りにしていた。ところが崇拜する巨星は地に墮ち、フランス大帝国は分解縮小し、彼の愛する郷土はフランスではなくなっていた。つまり彼はいつの間にか外国出身の将校という目で見られる立場に陥っていた。⁽¹⁷⁾

このような状況の下にあつて、なおかつフランス軍にとどまるためには、彼の周囲の視線に対しても普通のフランス人将校以上にフランスへの愛国心を鮮明にしていなければならなかったであろうし、また自分の心に対しても祖国愛を明確に認識し、自己鼓舞を意識的に続けていく他はなかったのであろう。このようなヴェルレーヌ大尉の愛国心は一人息子のポールの精神に影響を与えなかつたはずはない。

国籍を個人の意志で選択する行為を、ポールもまた「宿命の脅威」として認識していた。少なくともラッキーな運命という考え方には立っていない。この点父親の意志を忠実に受け継いでいるということが出来る。すなわち彼は『自伝』*Autobiographie* のなかで次のように語っている。

「ポール・ヴェルレーヌは宿命の脅威によるかのようにメッスに生まれた。この運命は彼を常に動揺させ、かくは立派な選択をしたにもかかわらず『Carnoto consule』祖国さえも奪ってしまったのである。⁽¹⁸⁾」
「土星の子」としての嘆きが痛切に感じられる一文である。しかもフランス敗戦によってポールが国籍の選択を

迫られたのは一八七二年九月、ロンドンに亡命中という、彼個人の生涯にとってもまた悲劇的な状況下にあった。

「最近私はナンシー Nancy とリェネヴィル Luneville を訪れた、そして私の同郷人たちから心暖まる

歓迎を受けて感激した。なぜなら私はこの国のこの部分に帰属しているからだ。私はメッスに生まれた、

そして私がフランス国籍を持つことを申告したのは、一八七二年、ここロンドンにおいてであった。」⁽¹⁹⁾

ここでポールは、父ニコラと同じように、フランスを祖国として選びとったのである。コミューヌ派としてフランスを追われた不遇な状況を、ドイツ人になるという手段によって一挙に解決しようなどという発想は彼の頭に浮かんでこなかった。それどころか、ロンドン在住の亡命革命家たちと交際し、彼らとともに祖国フランスを論じ、急進的で理想的な政治論を戦わせていたのである。

このようなヴェルレーヌにとって、フランスへの愛国心はいやが上にも鮮烈に高揚していったであろうし、また常に高揚しつづけざるをえなかったであろう。彼の愛国心の性格の烈しさもまたそこから理解されなければならない。い。

結 論

以上論じてきたことによって、ヴェルレーヌの愛国心の特徴はじゅうぶん鮮明に浮彫りにされ、その熱狂的な性格の原因もまた理解できたのではないかと思う。筆者はここでヴェルレーヌの愛国心を象徴するものとしてフランス国歌を指摘しておきたい。

およそ世界の国歌のなかでフランス国歌ほど戦闘的であり、感情的であり、敵国に対する敵意をむき出しにしたものはないであろう。文化国家のイメージとはほど遠い血腥い歌である。しかしフランス国歌『ラ・マルセイエー

『*la Marseillaise*』が製作されたときの状況を再現してみるならば、この歌がなに故にこのような調子になったのかという必然性は、誰にも容易に納得しうるものとなる。一七九二年ルーシェ・ド・リール Rouget de Lisle によってこの歌が作詩作曲された当時の状況、つまり迫りくる優勢な敵軍に対してフランスライオン軍の志気を高揚させ、ストラスブールを中心としたドイツ国境地帯の市民をフランス革命軍に志願入隊させるために作られ、歌われたときの状況に注目しなければならない。そして時は既に半世紀以上も流れたにもかかわらず、これとまったく同じ状況の下にヴェルレーヌは絶えずいたのである。大多数のフランス人には一つの歴史となりつつあった状況が、ヴェルレーヌにとっては自己の生に直接迫ってくる敵しい現実であり続けたのである。従って『ラ・マルセイーズ』の内容・調子はヴェルレーヌの愛国心そのものだったのである。

祖国の宿敵たる隣国と国境を接し、隣国と直接的な利害関係を常に肌身を感じる辺境人が抱く熱烈な愛国心が、既に見てきたようにヴェルレーヌの愛国心の主調である。この主調は軍人の子という彼の家庭環境によって、メッスという土地の環境によって、父親ニコラの個人的歴史によって、またポール自身としては普仏戦争によって、敗戦による国籍選択という行為によって常に刺激され、強化されていった。

更にこれは彼が体質的に持っていた感情のアンビバランスによって増幅され、大きな振幅を示す感情の波を描く形で表現されることになった。彼の愛国心が時には感情的盲目的な色合いを帯びて見えるのはこの故である。

またヴェルレーヌの愛国心の性格が現実生活密着型であり、情緒的であって、観念型・思想型でないことは当然であろう。思想的には青年時代普仏戦争までは左派⁽²¹⁾であったのが、カトリックに回心してからは必然的に右傾化していく。晩年カトリック系の雑誌に寄稿した論文等には、アンシャンレジームへのノスタルジーと讚美が明らかにうかがえる。⁽²²⁾このように政治思想等には一貫性を欠き、この面からの批判は免れないにしても、祖国フランスに對

するポール・ヴェルレーヌの一人な愛情と帰属意識は一貫して揺がなかった。彼はメッス生まれのフランス人として、詩人として、熱狂的な愛国者であったと結論したい。

(1) Paul Verlaine: *Œuvres poétiques complètes*, p. 697, Pléiade, 1968, Paris.

(2) 拙論「ポール・ヴェルレーヌとマリ・ロシュヌー——ルイーム・ミシュルに捧げられた「ムラード」——」教養論叢第57号 16~17ページ参照。

(3) Paul Verlaine: *Œuvres en prose complètes*, p. 443, *Confessions, Première Partie*, Pléiade, 1972, Paris.

(4) ドエ家の祖先は北仏の都市アラス Arras の出自で、十八世紀以来油製造業に従事していた。一七四二年頃からアラス近郊の村ファンブー Rampoux に住みつき、土地と油製造用の水車を所有していた。大革命時代には、ポールの母方の曾祖父にあたるビエール・ジョゼフ・ドエ Pierre Joseph Dehe の名まえが、地方大篤農家のリストのなかに見出される。ビエール・ジョゼフの長男は油製造業者としてアラスに住んだ。詩人の祖父にあたる次男のジュリアン・ジョゼフ Julien Joseph Dehe は大地主の一人として農業を営み、一八〇三年まで村長を勤めた人である。このようにドエ家は裕福な地方地主階級に属していた。青年時代のポールが休暇のたびにファンブーを訪れ、この自然に親しみ、この土地の人びとと広く交わっていたことは、既に発表した諸論文で数回指摘した。

(5) 「フランス南部地方の雰囲気に対する本能的な反感を除いては、幼年期において特筆すべき思い出は少ない。それはヴェルレーヌがなによりも北国の子 *le fils du Nord* であるからだ。」Jacques-Henri Borneoche: *Verlaine*, p. 12, Seuil, 1967.

(6) Paul Verlaine: *Œuvres en prose complètes*, p. 1068 *Nos Ardennes*, Pléiade, 1972, Paris.

(7) 彼はアルデンヌの森を次のように歌っている。

私の父の国では数知れぬ森がある。

そこには時どき狼たちが影のなかで目を光らせ

「けもちは柏の木の根元に黒い姿をみせる。」

Paul Verlaine: *Œuvres poétiques complètes*, p. 441, *Paysages, Amour*, Pléiade, 1968, Paris.

ヴェルレーヌが「北国の子」であったという指摘は、たとえ父祖の土地アルデンヌの森によって象徴される彼の体質として、彼の詩作品にも容易に結びつく。数々の謎を秘めた暗く深いアルデンヌの森は、厚い霧のヴェールの向う側から彼かに透しみえる本源的な生のイメージに意識を集中するというヴェルレーヌ詩の主調にみごとに対応するものであり、彼の傑作の多くはこの主調に乗って産みだされている。このように彼の風土性は作品に明瞭に反映されるのだが、この件については今回は詳論しない。

(8) Paul Verlaine: *Œuvres poétiques complètes*, p.p. 903~904, *Invectives*, Pléiade, 1968, Paris.

(9) *Ibid.*, p. 903.

- (10) *Ibid.*, p. 902.
- (11) *Ibid.*, p. 903.
- (12) *Ibid.*, p. 904.
- (13) *Ibid.*
- (14) *Ibid.*
- (15) ロンドンで発行された新聞『未来』*Avenir* 紙は一八七二年十月五日号に次のような記事を載せている。この一文はヴェルレーヌと同じ境遇にあった人びとの不幸を容易に推測させるに足るものである。
- 「ナンシー Nancy の町は驚くべき苦しみで沈んでいる。フランス国籍を選択しなかったすべてのアルガス・ロレーヌ系住民を町で探したために、今夜半、家宅捜索が行なわれる間、プロイセン占領軍は停車場を軍事占領するであろう。当該住民は住居及び避難所から引き離され、プロイセンへ送還されるであろう。」
- Paul Verlaine: *Œuvres en prose complètes*, p. 1497, *Articles anglais*, Pléiade, 1972, Paris.
- (16) *Ibid.*, p. 450.
- (17) ヴェルレーヌ大尉が一八五一年に軍職を去ったのは昇進問題がこじれた故であるとされている。彼はまだ五十歳になったばかりの壮年期にあたり、上司も彼の辞職を思い止まらせようという説得したにもかかわらず、彼はあれほど好きだった軍職をあつさり捨ててしまったのである。問題が昇進人事に関するだけなら、これはヴェルレーヌ大尉が常に抱いていたフランス軍人としての自己確認をめぐっての屈折した心裡の原因があったのではないかと筆者は推定する。おそらくヴェルレーヌ大尉の周辺にいたニール大佐をはじめとする善意の人びとは、生まれながらのフランス軍人であるだけに、大尉の不满をひき起こした複雑な心境をはっきり読めなかったであろう。
- (18) Paul Verlaine: *Œuvres en prose complètes*, p. 424, Pléiade, 1972, Paris.
- (19) *Ibid.*, p. 1110, *My visit to London*, 原文は英文。
- (20) ヴェルレーヌは一八九一年にジュール・ユレ Jules Huret がおこなったアンケートに対して次のように答えている。
- 「この私はフランス人だ。——特に、私がフランス人の盲目的愛国者 Chauvin であることを理解して欲しい。」
- Ibid.*, p. 1135, *Réponses à diverses enquêtes, Enquête sur l'évolution littéraire*
- このように彼は自ら Chauvin であると自認していた。多少の誇張が感じられなくもないが、しかし確かに盲目的なほど熱烈な愛国者であったヴェルレーヌの基本的な姿勢を卒直に示している一文と考えてよいであろう。
- (21) 拙論『ポール・ヴェルレーヌとパリ・コミュニケーション——ルイーズ・ミシェルに捧げられた「ペラード」——』教養論叢 57号参照。
- (22) Paul Verlaine: *Œuvres en prose complètes*, p. p. 1004~1017, Pléiade, 1972, Paris. 特々 *Voyage en France* の第三章及び第四章で「の傾向を読む」ということがよく見られる。